（１）下田中学校

学　　校　　長　山沖　美保
校内研究代表者　和泉　真智子

１．研究主題

「主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業づくり」
～基礎・基本の定着をふまえた表現力の育成～

２．主題設定の理由

本校の生徒は、小学校から固定化された集団の中で育ってきているため「周りから受ける学習への刺激が少ないこと」が学習環境上の課題となっている。また、学習に対する意欲や主体的・対話的な学習活動への積極性の乏しさも多くの生徒に共通する課題である。

各種の学力調査の結果からは、多くの生徒に思考力・判断力・表現力の弱さが見られる。特に表現力に関しては、授業実践の中で各教員がつけさせたい力だととらえている。加えて、学習の基礎・基本が十分に身についておらず、個別支援が必要な生徒も各学年に数名在籍している。

このような課題や実態を踏まえ、本年度は基礎・基本の定着を図る取組も重点化し、効果的に表現力の育成に関連付ける研究を進めることで、表現力の育成を目指したい。具体的には、単元目標の達成に向けて単元や内容のまとまりごとに学びを振り返る場面を、効果的かつ適切に設けることで、表現力の向上につなげていきたい。また、一人ひとりが意欲的に学習に取り組めるように、効果的な課題の設定及び、発問の工夫の研究を通して、主体的・対話的で深い学びの実現を目指し、研究を推進する。

３．研究の進め方と方法

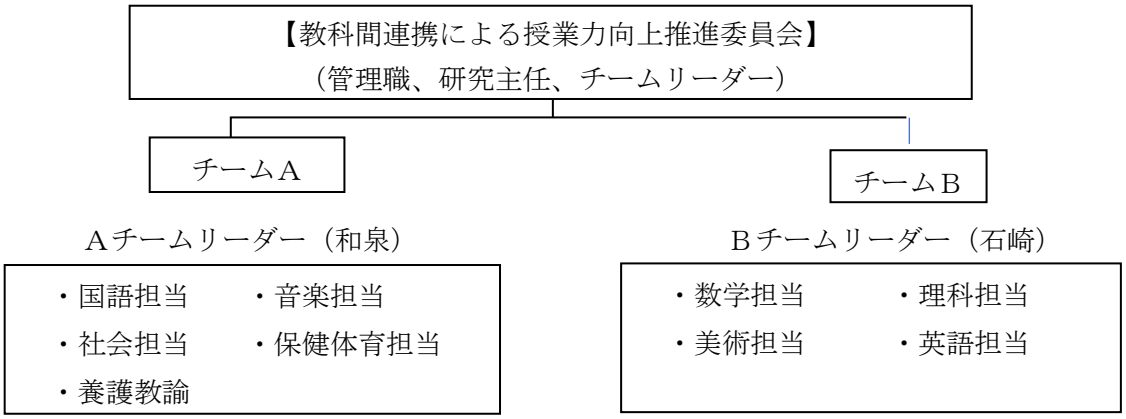
チーム会を軸にした以下の４つの取り組みにより研究を進めている。

（１）チーム参観　（２）チーム協議　（３）校内研修　（４）実践ミニレポート

研究チームを２チーム編成し、毎週木曜日と金曜日にチーム会を実施する。研究授業の２週間前に指導案検討会、１週間前に模擬授業をチーム会で行うことで、授業の流れや発問の工夫をチームで考え、研究授業の後、振り返りの時間を設定し改善点や共通の課題、今後の取組について協議する。

また、校内研修において、２チームの研究の進捗状況を報告し、全員で学びを共有する。

学期に一回は指導主事を招聘することで、新学習指導要領についての学習を深める。

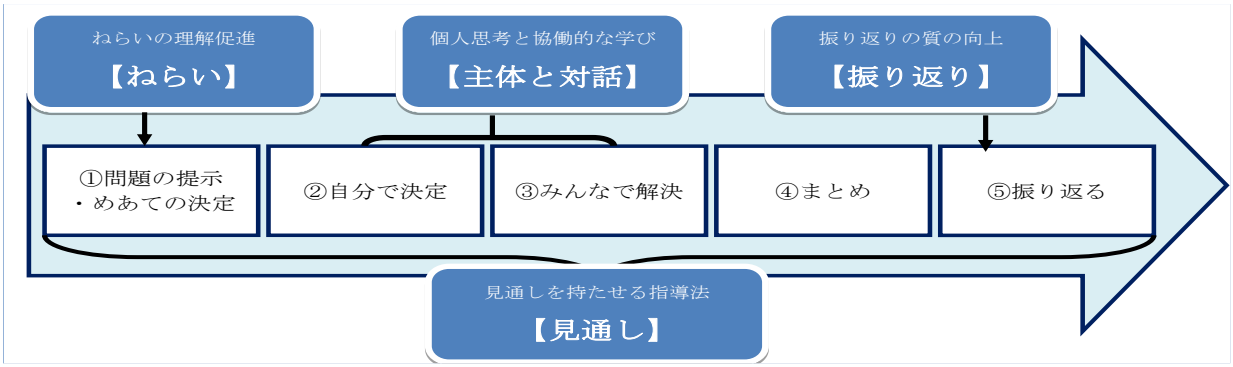


４．研究内容　～教科間連携による授業力向上の取組について～

今年度は、昨年度の課題や生徒の実態を踏まえて、取組内容を見直しつつ、思考力・判断力・表現力のさらなる育成をめざし、授業改善や授業力向上のための体制づくりが構築できるよう研究している。また、研究主題に迫るために、次のような研究仮説のもと、主体的で対話的な深い学びを目指した授業づくりの実践を行ってきた。

①1 時間の授業の中で効果的な繰り返し学習の場を設定することで、基礎的・基本的な知識・技能を習得することができるであろう。
②学ぶ意欲を高める主発問や課題設定の工夫を行うことで、表現力が高まるであろう。

これらの仮説から、今年度は、①基礎・基本の習得に結びつく効果的な繰り返し学習の設定、②学ぶ意欲を高める効果的な課題設定・発問の工夫、③下田の学びのスタイル（下図）の充実、の３つを具体的な研究内容とし、取組を継続してきた。



【教科間連携を中心とした研究サイクル】

（１）チーム参観(授業研)

参観者と授業者が協議等によって学びを深めるためのチーム総見授業を行っている。授業を参観する時には、参観シートを活用して授業を見取っている。また、参観シートには生徒のつぶやきや活動の様子を記入しチーム協議時に活用している。チーム総見授業は各学期に各自が 1 回ずつ行うこととし、全校研は、各学期各チーム一回ずつ授業を行った。

（２）チーム協議

毎週木・金曜日の時間割に組み込んでおり、(1) のチーム参観を受けて参観した授業の事後協議を行ったり、次回の授業者の学習指導案の検討や模擬授業を行ったりする。また、定期テスト・各種学調査の振り返り等を行うこともあるが、主に研究主題に迫るための具体的内容について協議を深めてきた。

（３）校内研修

①指導主事の講師招聘

講師を招聘した全校研としては、１学期は「新しい学習評価について」という内容を西部教育事務所の指導主事を招聘し研修を行った。そこで今年度から 3 観点での学習評価をするにあたり、どのような準備をしておかなければならないかということを全員で共通認識することができた。2 学期には、全体の授業研の講師として来ていただき新学習指導要領に沿った授業づくりについて研修を深めた。

②各チームの取組の情報共有

（２）のチーム協議を受けて、企画委員会・研究推進委員会・全校研にて、各チームの取組内容の情報共有を行う。内容によっては指導主事を招いた研修を校内研修に取り入れたり、新たな取り組みを決定したりするなど学校全体の取組の参考にする場合もある。また、チーム参観後に話された振り返りの内容については、校内研だよりを配布し全体で共有することができた。

③実践ミニレポート

各学期末に授業者の学びを深めるための自身の実践をまとめたレポートを作成し、各チームで発表しあう。その後、学期末の総括校内研で全教員が発表し、成果のあった取組や課題の共有をする。レポートは「校内研の取組が授業改善・学力向上に効果があったのかどうか」を大きな視点として、具体的な取組（以下①②）について記入している。生徒の変容が目に見えるように成果物を添付することもある。

この取組は授業者に、自分の授業の振り返りを促すとともに、教員相互で学び合い、授業実践し、さらに授業改善を図ることを目的としているが、他の教員の発表内容（取組）を自身の授業に取り入れたり、その後の実践に活かしたりする等、より深い実践となっている。

毎学期の総括はレポート発表を中心として行っているが、1学期の総括から見えてきた課題を踏まえ、2学期からはレポートに記入する新たな項目として、「基礎学力について」、「表現力につながる指導をどのように取り組んだか」、「各学年の取組（個別支援）について」の項目を加えた。

具体的な取組

①場面・内容に応じた学習形態の工夫（個・ペア・グループ・全体(学級・全校)）

②（単元や内容のまとまりごとの振り返りも含む）ノート指導の工夫

③（2学期より）基礎学力について・表現力につながる指導・個別支援の工夫

また、根拠をもとに自分の考えを言えたり書けたりできるよう、発表や説明の仕方を身に付けるために、研究授業の中で必ずペア学習の場面を設定することを全体で確認した。

５．今年度の成果と課題

主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業づくりという研究主題で、チーム会を中心とした授業改善に向けた取組を実施することができた。学期に1回全教員が授業研究をするために、2週間前には指導案検討会を行い、教師が生徒役となり模擬授業を行うことで、教科の枠を超えた新しい意見も聞くことができた。そのことで生徒の興味や関心を引く課題設定や発問の工夫ができていたように思う。時には、思うような反応が得られず、後の協議で課題や反省点として挙げられることもあったが、授業者だけでなく参加した全教員が自分の授業改善のために活かすことができていた。また、違う教科でありながら関連性のある教科同士の助言を授業で活かすことができるなど、教科間連携の良さがみられた。

最後に、各種学力テスト等の結果分析を行う中で、自分の考えや感想を書く問題が苦手な生徒や、数学的な表現を用いて表現することに課題がある生徒、個別支援が必要な生徒等、個々の生徒の学習課題が見えてきた。生徒一人ひとりの課題を克服するための具体的な手立てを共有し、個別支援の支援体制をいっそう整えていく必要を感じる。これらのことを踏まえて、生徒の実態に応じた授業改善をするために、「どんなことができるか」「どんな成果があったか」を検証しながら、今後も研究・実践し、生徒の資質・能力を高めていきたい。